

一大窯業地帯・三田^{ようぎょう}

市域では古代の窯跡^{かまあと}がたくさん見つかっています。古いものでは、古墳時代の5世紀代までさかのぼる窯跡が現在のウディタウン地区内や青野ダム周辺で発掘されています。これらの窯跡で生産された焼物は、朝鮮半島由来の技術に連なる硬質の製品で、



末にある須恵之丘

「すえのうつわもの」と呼ばれ、漢字では「須恵器^{すえき}」または「陶器」などと表記されました。ちなみに広野地区の末という地名は、須恵器の産地であったことによると考えられます。室町時代の古文書には「陶村^{すえむら}」とも記されており、地名の由来を確かめることができます。

須恵器は、我が国在来の土器作りとは異なる本格的な窯を使用し、高温で焼き締め

て作られました。そのため生産のための技術はもちろんのこと、適度な傾斜をもつ地形や高温に耐える粘土、そして大量の燃料が確保できるといった条件がそろった地域でなければ生産が困難であったと考えられます。

10世紀に編さんされた「延喜式^{えんぎしき}」という記録には、市域が属した摂津国^{せつつのくに}の特産品として、須恵器と思われる製品名がいくつか記されています。摂津国内^{せつつのくに}である現在の吹田市や豊中市周辺でも大規模な窯跡が発見されています。市域はこれらと並ぶ産地であったと考えられますが、いずれも摂津国北部に位置し、大阪層群と呼ばれる地層で形成された段丘地形^{だんきゅう}が分布するという共通点があります。

古墳時代中期に始まる市域の焼物生産は、平安時代以降になると藍地区や高平地区に生産の中心が移動します。藍地区にはとりわけ多数の窯が群集し、かなりの生産量をもつ摂津国有数の窯業地帯であったと思われます。また、この伝統は、丹波焼の生産にも影響を与えた可能性があり、江戸時代の藍地区では、大量のすり鉢が生産されていました。このように有数の規模を持つ三田の窯業生産の伝統は、地質・地形・豊かな森林資源といった里の恵みの上に、先人の技が加わって創り上げられたのです。